



新会長インタビュー

濱田 政則

HAMADA Masanori

土木学会 第94 代会長

一番大事なことは社会への信頼を回復すること。
そのためには市民に密着した活動が大切になる

2006 年 6 月 2 日[金]
13:30 ~ 15:00 役員会議室

提言だけでなく、 政策にまで反映させていく

——新会長への就任おめでとうございます。まず始めに、新会長としてのこれからの抱負をお聞かせください。

濱田——土木界全体を見ますと、公共事業投資の長期的な減少、官製談合に端を発した土木事業への批判など、非常に厳しい状況にあります。そのなかで、このような状況をどう克服し、新しい土木界を構築していくか。土木学会として非常に大きな役割があると思います。一番大事なことは、土木事業や土木技術者に対する社会の信頼を回復することです。信頼がない状態で、社会資本整備が緊急の問題だとか、安全安心社会への構築に必要な不可欠だとかいっても、国民的な合意形成には結びつきません。

最近、土木学会では、自然災害

の被災地の復旧・復興に対する技術支援、学生会員を主体とした国内外の防災教育活動、支部での小学校・中学校などを対象とした出前授業や一般市民を含めた見学会などを行っています。社会からの信頼を回復するためには、こうしたいわゆる草の根的な市民に密着した活動を、積極的に展開していかなければならないと思っています。

また、土木学会では、これまでさまざまな提言をまとめていますが、なかなか外にまで伝わっていません。いい提言ができれば、マスコミを通じて発表するとか、土木出身の国会議員の方々や首長の方々に政策として反映してもらうなど、ロビー活動などもしていきたいと思っています。

学会として社会への 貢献に努めていきたい

——最近、世界的規模で災害が頻発し、防災に関する関心が高まっています。日本および世界で、日本の土木技術者としてどのような貢献ができるでしょうか。

濱田——この20年間をみると、地

震災害や風水害などの自然災害は増えてきています。地球規模の気候変動に起因しているものもありますが、問題はそれら災害の被害者の90%以上が、アジア諸国だということです。災害国日本で、これまでさまざまな被害を受け、防災に対する技術を蓄積している私たちが、そういった国々をいかに支援するかということは、非常に重要です。

私も昨年、スマトラ沖地震やパキスタンの地震で、現地へ何度も行きましたが、そこで感じるのは、日本に対する信頼感、日本の土木技術に対する信頼感が非常に高いということです。今までは調査主体でやってきましたが、やはり本当に被災地に役に立つことをやろうということで、昨年のパキスタンの地震では、まず先遣隊を派遣。現地の機関の要望をお聞きし、土木学会と日本建築学会が共同で本隊を送り、現地の技術者を集めて、被災構造物の診断法や、被害を受けた構造物の補強方法、インフラの復興方法などを支援してきました。今度のジャワ島の地震でも、6月10日に先遣隊を派遣し、現地の



機関と接触しています。1998年にまとめられた「JSCE2000」でも、社会への直接的貢献を謳っています。学会としていかに社会的に貢献ができるかということ、これからの考えていきたいと思っています。

また、防災では、NPO「国境なき技師団」を設立しました。その目的は、防災活動に関して、専門家だけでなく、市民にも参加してもらうということです。土木学会にもっと市民を呼び込むために、防災なら防災でNPOをつくり、そこに市民に参加してもらい、それを土木学会、建築学会が応援するという戦略などを考えています。

ASCEの国際会議で 土木の将来像を発表

——新会長が期待する土木界や土木技術者に対する将来像はありますか。

濱田——今年の1月、米国土木学会(ASCE)より、6月にワシントンで行われる「Summit of the Future of civil engineering」という国際会議の通知がありました。アジアでは2人が選ばれました。

そこで、日本の土木学会として何を主張すべきか、皆さんからご意見をいただきました。相当の意見をもらいましたが、そのなかで



私が印象に残ったのは、「市民の目線に立った土木」、「市民の共感と感動を呼ぶ土木」というキーワードです。まさにこれはシビル・エンジニアリングの原点に立ち返ろうということです。現在、私のほうでまとめて、ASCEで報告しようと思っています。

内容的には、1番目のテーマは、21世紀に入って四半世紀に入る20年後の2025年に、世界や日本を取巻く状況がどうなっているのかということです。環境、防災、食糧、エネルギーなど、さまざまな問題があり、それらを皆さんに議論していただき、まとめます。2番目は、そういう状況をみて、土木技術者は何をするのか、土木技術者の役割は何かということです。3番目は、そのために、土木技術者はどういう資質をもっているなければいけないか。4番目は、そのために土木学会は何ができるかということです。JSCEとしての英文の冊子もつくって、Summitで配布する予定です。

土木技術者が国内外で 活躍する機会は近づいている

——最後に、これからの土木を担う若い人へのメッセージをお願いします。

濱田——先ほど土木を取巻く環境が非常に厳しいということを言い



ました。しかし、私は、土木技術者が国内をはじめ国際的に活躍する機会は近づいていると思っています。たとえば、アジア地域の自然災害の軽減のための基盤整備や、世界的な自然環境や都市環境の悪化への対策、エネルギー問題の解決。国内では社会整備基盤の維持管理、長寿命化など、土木分野は広がりつつあります。ですから、これからがまさに土木の時代だと思っています。もちろん、そういった役割を担い、仕事に取り組むためには、やはり多くの知識が要求されます。土木工学にとどまらず、幅広い分野の見識や、社会とのコミュニケーション力、企画力、マネジメント力、国際力などが要求されるでしょう。

土木学会の初代会長の古市公威先生が、工学を統べるものは土木技術者であると言ったように、土木技術者が工学技術者の上に立つ。そういったことが要求される時代が来ると思います。そのためにも、若い土木技術者は、ほかの分野の技術者の2倍も3倍も、研鑽と勉強をしていただきたいと願っています。



聞き手
学会誌編集委員長
天野玲子